

2010年3月9日

私立大学図書館協会  
国際図書館協力委員会  
委員長 白井 文子 様

法政大学図書館  
山田 賢悟

## 2009年度海外派遣研修報告書

- I. はじめに
- II. 研修参加目的
- III. モーテンソンセンター概要・研修参加者内訳
- IV. アソシエイツプログラム概要
- V. アメリカの大学図書館における動向
- VI. 課題・感想

### I. はじめに

このたび私立大学図書館協会国際図書館協力委員会より派遣していただき、イリノイ大学モーテンソンセンター<sup>1</sup>の国際図書館プログラムに参加する機会を得た。期間は、2009年9月14日から10月30日までの7週間。協会からの派遣は7人目の参加者となる。

### II. 研修参加目的

電子資料の普及に伴い、Webを基盤とした情報の収集・蓄積・加工のための利用環境を整備することが大学図書館の課題の一つとなっている。Web2.0の技術を図書館サービスに利用したLibrary2.0という概念が語られて久しいが、先行する米国で、Library2.0の動向と効果的な事例を学ぶ。

### III. モーテンソンセンター概要・研修参加者内訳

1986年、C.Walter氏とGerda B.Mortenson氏の寄付200万ドルによりモーテンソンセンターは創設された。当初は同氏の名前を冠した教授ポストに基金があてられていた。同ポストは国際教育と相互理解、そして平和の促進に焦点を定めた図書館学の提供を目的としていた。その後、1991年に追加寄付200万ドルを得て、地理的な所在やテクノロジーへのアクセスに関わらず、図書館とライブラリアンの国際的な絆を深めることを目的とし、世界各国のライブラリアンに対して、実務レベルの研修を提供することになった。現在までに89カ国から700人を超えるライブラリアンがモーテンソンセンターで国際図書館プログラムに参加している。また、センター運営に際しては、基金の運用益だけでなく、ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団など、各種財団・基金の支援を積極的に獲得し、プログラムを展開している。

2009年度秋期プログラム参加者は、南アフリカ4名、ウガンダ1名、ナイジェリア2名、コロンビア2名、トリニダード・トバゴ1名、ジョージア1名、ベトナム1名、韓国1名、日本1名、計14名の参加。参加者の所属は大学図書館、国公立図書館をはじめ、各国図書館協会など多岐にわたる。昨年度、日本からの参加者は3名(教員1名、図書館員2名)であったが、本年度は私立大学図書館協会から派遣の山田、1名のみでの参加となった。近年の特徴として、アフリカ諸国からの参加者が増えている。

### IV. アソシエイツプログラム概要

研修プログラムの内容は大きく6項目に分けられる。

1. 北米図書館の最近の動向に関する講義
2. ニュー・テクノロジーに関する講義
3. 図書館ツアー(大学図書館、公共図書館、専門図書館、その他関係団体)
4. 学内外の会議、講演会への参加
5. プレゼンテーションのための講義と実践
6. ライブラリアンへのインタビュー

## 1. 北米図書館の最近の動向に関する講義

学内外の実務担当者により、グラントライティング、アドボカシー、ライブラリーマーケティング、機関リポジトリ、ライブラリーアセスメントなど、北米図書館の動向について講義を受けた。

- ・ 米国の教育事情
- ・ イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校(The University of Illinois at Urbana-Champaign、以下 UIUC に略) 図書館の構成(組織図)
- ・ Disc アセスメント(コミュニケーション改善のための自己診断ツール)
- ・ グラントライティング
- ・ 情報リテラシー
- ・ IFLA インターネットマニフェスト(2回)
- ・ 館長(研究科長)の一日
- ・ 大学院図書館情報学研究科(The Graduate School of Library and Information Science、以下 GSLIS に略)について
- ・ アドボカシー(Advocacy) (2回)
- ・ ライブラリーマーケティング
- ・ プロジェクトマネジメント(4回)
- ・ リンカーンコレクション
- ・ IDEALS(機関リポジトリ)
- ・ Savvy Researcher(優れた研究者になるためには)
- ・ 付属高校図書館とオンラインの倫理
- ・ 公共図書館と許容性
- ・ コピーライト(著作権)
- ・ レアブックライブラリー
- ・ コミュニティインフォマティクス
- ・ 障がい者サービス
- ・ ファンデーション(基金)
- ・ 多様性、多文化サービス
- ・ ライブラリーアドバンスメント(募金)
- ・ ライブラリーアセスメント
- ・ ライブラリーマネジメント

印象に残った講義を紹介する。

### (1) ライブラリーマーケティング

マーケティング理論を用いて図書館サービスの分析を行う。「マーケティング・アズ・コミュニケーション」をキーワードに「口込みコミュニケーション」などのマーケティングの手法が紹介された。中でも顧客(利用者)を分類して提供するサービスを考える、という視点は印象的だった。

#### <分類>

<b>Champions</b>	図書館の良さを知ってくれて、応援してくれる利用者
<b>Clients</b>	応援まではしてくれないが、良く利用してくれる人
<b>Customers</b>	ちよくちよく、利用してくれる人
<b>Prospects</b>	足を運んでいないが、利用が期待できる人
<b>Suspects</b>	アプローチしても利用が期待できない人

ライブラリーマーケティングでは、“**Champions**”の「図書館の良さを知ってくれて、応援してくれる利用者」を増やすことに焦点が定められている。それぞれの分類(段階)に応じたサービスを提供し、最終的には“**Champions**”の分類になるように利用者へアプローチしなければならない。

## (2) アドボカシー

アドボカシーは図書館の現状と必要性の理解を訴えるキャンペーン活動である。図書館への理解、予算獲得、資金集めを組織で、利用者を巻き込んで行う運動である。運動を通じ、図書館の存在感を高め、利用者を増やすことも目的としている。米国では、行政の予算配分にも市民の声が反映される。前述したライブラリーマーケティングの顧客分類が、最終的な目標を「図書館の良さを知ってくれて、応援してくれる利用者」を一人でも増やすことに焦点が定められているのも、この為である。公共図書館の利用者や地域コミュニティのリーダーが、このアドボカシーによって図書館の立場、良さを理解して図書館を応援している。

講義では、各自が所属する組織で経営責任者(知事、学長、社長など)を相手に、いかに予算を獲得するかを考えた。例えば、図書館が支援者と共に、チャリティーパーティーを企画し、知事などを招待する。そして、図書館の支援者を交え、コミュニティにとって図書館がいかに重要な役割を果たしているかを訴える。その他、手書きのメッセージを招待状に入れておくなど、様々なアイデアが披露されたが、実際に考えてみると、上手にアピールできないものである。同様に、利用者(教員など)、同僚にキャンペーン活動に参加してもらうためには、何を、どのように伝えれば良いかも話し合ったが、良いアイデアは出なかった。常日頃から図書館サービスを可視化(ミッションステートメントやアセスメントなど)しておくと同時に、説得力のあるエピソードを準備しておく必要があると感じた。

## (3) IDEALS<sup>2</sup> (Illinois Digital Environment for Access to Learning and Scholarship、機関リポジトリ)

UIUC の教職員、院生はオンラインで IDEALS へ投稿できる。既に公開済み(出版済み)の論文については、著作権の問題が生じるので、投稿者自身が解決しなければならない。出版社との交渉が必要となるが、SHERPA/RoMEO<sup>3</sup>や Journal Info<sup>4</sup>を利用すれば、権利関係の確認が可能。IDEALS は出版社から著作権の譲渡を求めない(公開の許諾のみ要)。多くの出版社が標準的なポリシーとして、リポジトリへの登録を許可している。概ね4パターンに分類され、刊行後2年を経れば機関リポジトリに登録できると言える。

リポジトリへの保管に関する許可	出版社
出版社の PDF 形式(すぐに OK)	IEEE, Duke University, University of California Press
出版社の PDF 形式(12-24 ヶ月の間は不可)	Cambridge University, The University of Chicago Press
最終原稿(すぐに OK)	Blackwell Publishing, Springer, ELSEVIER
最終原稿(6-24 ヶ月の間は不可)	Taylor & Francis, SAGE, npg, Routledge

IDEALS は学長室のサポートのもと、図書館と CITES<sup>5</sup> (Campus Information Technologies and Educational Services の略、キャンパス全体を対象にした IT 支援室)が連携してサービスを提供している。2009 年 10 月の時点で約 12,000 件(2010 年 1 月時点では約 13,000 件)の論文・資料を登録している。IDEALS は研究成果の長期保存を約束すると同時に、外部への情報発信も積極的に行っている。ダウンロード件数の多い論文・資料を月ごとに、Top10 ランキングとして公開しているため、利用者はどんな資料にアクセスが多いのか知ることができる。今後、ダウンロード数の統計については、月次(又は週次)の報告を予定している。IDEALS は情報発信により、研究成果のインパクトをより大きくすることを目指している。IDEALS に登録することによって、GoogleScholar などのサーチエンジンで検索されるようになり、OAIster など他のデータベースにもメタデータが登録される。基本システムはオープンソース・ソフトウェアの Dspace を利用している。投稿された原稿の PDF ファイルへの変換もフリーウェアの OpenOffice.org<sup>6</sup>を利用。IDEALS 用サーバー(6TB まで拡張可能)は CITES が管理しており、キャンパス外にバックアップ体制を整えている。新たな取り組みとして、データキュレーションがあげられる。現在、①ハタネズミの個体数(25 年間)、②極温度、③X 線結晶解析データ、④人類学データ、⑤農業データなどのデータセットの保存方法について検討を始めている。また、データキュレーションの必要性を調査するための補助金をパデュー大学図書館と GSLIS が共同で獲得している。

米国のオープンアクセスの動向は気運が増していると言える。既に、国立衛生研究所(NIH)が資金提供した研究については、成果を PubMed へ登録することを義務化している(2007 年 12 月)。それだけでなく、議会では過去に否決された、連邦政府の資金援助による研究成果を全てオープンアクセス化する法案が再提出(2009 年 6 月)されている。一方で、機関リポジトリの質を高める取り組みも見られる。米国の研究図書館グループ(RLG)と国立公文書館(NARA)のタスクフォースは機関リポジトリの自己点検、外部評価が可能となるよう「信頼できるデジタル・リポジトリの認証のための監査チェックリスト」を発表している。

図書館はリポジトリへの理解を深めるために、オープンアクセスをテーマにしたワークショップや著作権に関する講演会などを開催している。これまでに様々な機会を通じて、オープンアクセスに対する考え方や、著作権に関する問題について、利用者の相談を受け付けてきた。そうした経験と蓄積を踏まえ 2010 年には、教員・大学院生を対象にしたスカラリー・コモンズを開発する予定である。

#### (4) ライブラリーアセスメント

アセスメントの意義(サービスの改善と可視化)、ARL<sup>7</sup>(Association of Research Library、北米研究図書館協会)の測定ツールである StatsQUAL (LibQUAL+, DigiQUAL、MINES for Libraries、ARL 統計、ClimateQUAL)などが紹介された。顧客(利用者)を中心に図書館サービスを評価すること、アセスメントを通じて図書館サービスを改善すること、改善プロセスを図書館スタッフ全員が共有し、組織文化として定着させることが重要であることを学んだ。

2001 年より UIUC 図書館では利用者サービスを評価するため Web を利用した測定ツールである LibQUAL+を使用している。集計結果はワーキンググループ(Library Assessment Working Group、以下 LAWG に略)により分析され、“Survey Analysis: Executive Summary and Recommendations(概要と提言)”<sup>8</sup>として公表される。また、同ツールは 1,000 館以上の図書館が利用しており、調査結果について自館との比較が可能となっている。

また、LibQUAL+だけでなく、職場の気風を測定するツール、ClimateQUAL などの導入も LAWG では検討されている。ClimateQUAL とは、図書館スタッフが多様性や組織のポリシー、仕事の進め方、スタッフの態度について、どのように感じているかを測定するツールである。LAWG ではライブラリアン間のコミュニケーションをより良くしていきたいと考えており、同ツールの採用が議論されているが、価格や内容などで満足できない点があり、まだ導入までには至っていない。

講義後、講師の Bob Burger 氏に「UIUC 図書館はとても進んでいるので、LibQUAL+を導入しなくても、独自の利用者(満足度)調査で良いのではないか?」、と質問したところ、「それは違う。UIUCこそ、図書館の組織が大きいので、目の行き届かないところが多い。私たちより優れている大学の図書館から学ばなければならない」、との答えだった。

## 2. ニュー・テクノロジーに関する講義

Facebook、Flicker、delicious など、図書館で活用されている Web の最新技術について説明を受けた。CommonCraft 社<sup>9</sup>の“Explanation in plain english”(手書きの切り絵によるアニメーション)シリーズなど動画を鑑賞すると同時に、簡単な実習を通じて Web2.0 の図書館サービスへの活用について学んだ。

### (1) Web2.0 と RSS

RSS は Web サイトの更新情報(ニュースのタイトルなど)を配信するサービス(フォーマット)である。UIUC 図書館の Web サイトでは少なくとも 30 以上の RSS を配信している<sup>10</sup>。

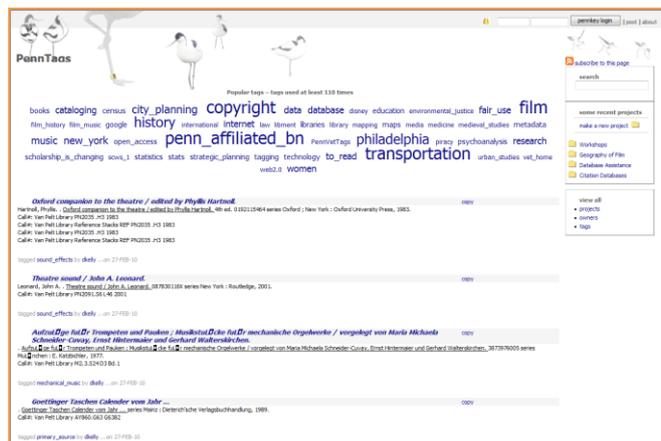
### (2) ライブラリーブログ

“Librarian and Information Science News”<sup>11</sup>が選んだライブラリアン 10 人のブログ(電子資料、公共図書館、Lib2.0 など)を中心にブログの活用について学んだ。利用者向けというよりも、ライブラリアン向けの専門的な内容が多く見られた。どのブログにも twitter や Flicker など、他のサービスが埋め込まれていた。

### (3) ソーシャルブックマーキング

自分のブックマークをネット上に公開し、他者と共有するサービス。delicious<sup>12</sup>、PennTags などの概要を学んだ。delicious は他者が登録している Web ページをキーワードで検索可能。図書館主催のワークショップでは、情報マネジメントスキルのツールの一つとして、紹介されている。

PennTags はペンシルバニア大学図書館の所蔵資料に利用者(学内関係者のみ)が自由に Tag をつけることができるサービスである。学外者は Tag をつけることはできないが、資料に付けられた Tag から関連資料など情報を得ることができる。



“PennTags” [1] (ペンシルバニア大学図書館ソーシャルブックマーキング)

#### (4) Facebook

代表的なソーシャルネットワーキングサービス。UIUC では学部図書館が学生向けに利用している。図書館のイベントやインフルエンザの感染予防、画像など様々な情報を発信している。また、FaceBook はアウトリーチサービスとしても利用されている。

#### (5) ユーザビリティテスト

ユーザビリティ(Usability)とは「使いやすさ」のことで、Web 上で情報を得るための操作性(ボタンの位置、構成など)を意味する。①紙に画面をパーツごとに描き、②各パーツで構成された疑似 Web ページを被験者に操作(クリック)してもらう。③実際の動作と同様に、次のページを並べ、④必要な情報を入手できるか操作性をチェックする。テストは複数回、問題点を修正するごとに、異なる被験者で実施する。



UIUC 学部図書館の“Facebook” [ii]

#### (6) インスタントメッセージング

オンラインレファレンスのツールとして、インスタントメッセージ(以下 IM に略)の概要が紹介された。UIUC 図書館では AOL 社の AIM WIMZI ウィジェット<sup>13</sup>(IM を Web サイトに貼り付けることが可能。サイトの訪問者は IM ソフトなしでサイトの管理者とリアルタイムでメッセージを交換できる)を活用している。UIUC では中央図書館のレファレンス担当(GSLIS の学生スタッフ、ライブラリアン)が質問に答えてくれる。受付時間は 24 時間ではなく、中央図書館の開館時間とほぼ同じである(金曜日を除く平日は夜 11 時 30 まで)。



(上)UIUC 図書館の“Ask a Librarian” [iii]

e-mail、電話、カウンターで問合せが可能

(左)UIUC 図書館のインスタントメッセージ

#### (7) メディアシェアリング

各種データや情報を共有するためのサービスについて説明を受けた。One True Media<sup>14</sup>(動画・画像の編集ツール)、Slide Share<sup>15</sup>(プレゼンテーションファイルの共有)、Flickr<sup>16</sup>(画像の共有)、Picasa(同左)、YouTube(動画ファイルの共有)、iTunesU(動画、音声)、Facebook(SNS、動画・画像)、RSS 等。

#### (8) デジタルコンテンツ・クリエーション<sup>17</sup>

貴重文献・資料のデジタル保存の現場を見学した。UIUC 図書館では 1994 年にデジタル化による保存とネットワーク上での利用を目的にデジタルコンテンツ・クリエーションチームを発足した。大型スキャナーを有し、地図から写真、マイクロフィルムに至るまで、資料の電子化を行っており、その一部は既に Web 上に公開されている。

### (9) GSLIS Help Desk<sup>18</sup>

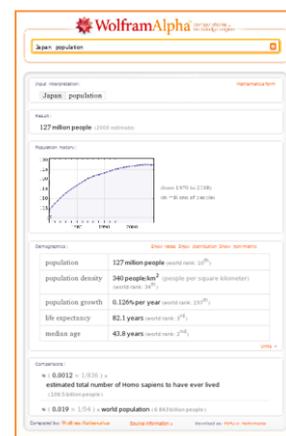
ヘルプデスクは GSLIS の院生に対し、IT 環境の利用をサポートしている。また、GSLIS はオンライン学習を中心にした修士課程のコース (LEEP) を開設しており、そのサポートも担当している。

### (10) Liblime<sup>19</sup>

オープンソースの図書館システム“Koha”について、遠隔会議システムで説明を受けた。

### (11) Wolfram Alpha

新型検索エンジン。Web ページの検索ではなく、質問に答えてくれる。



WolframAlpha [iv]

### (12) Mobile Libraries

携帯電話向けサービス (移動図書館ではない)。

※UIUC 学部図書館では 2009 年 12 月 15 日より、iPhone (iPod touch) 用のアプリケーションの提供を開始している。DVD、ゲームソフト、旅行本、ドラキュラ小説、漫画などの新規購入資料に関する情報を発信。

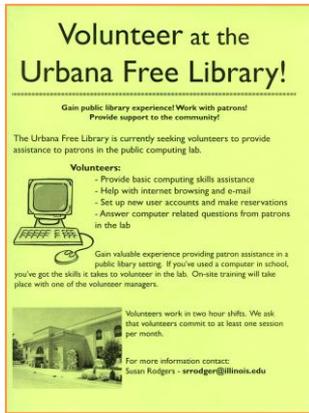
## 3. 図書館ツアー (大学図書館、公共図書館、専門図書館、その他関係団体)

大学図書館、公共図書館から博物館図書館まで、様々な図書館と OCLC、全米図書館協会本部を訪問した。

- ・ Main Library & Undergraduate Library (中央図書館 & 学部図書館)
- ・ OCLC 本部
- ・ Westerville Public Library (ウェスタービル公共図書館, オハイオ)
- ・ American Libraries Association (アメリカ図書館協会, シカゴ)
- ・ Chicago Public Library (シカゴ公共図書館, シカゴ)
- ・ Lincoln Trail Libraries System (リンカーントレイル図書館システム)
- ・ The News-Gazette (ニュース・ガゼッタ社)
- ・ Brookens Library (ブルックン図書館, イリノイ大学スプリングフィールド校)
- ・ Lincoln Presidential Museum Library (リンカーン大統領博物館図書館, スプリングフィールド)
- ・ Oak Street Library Facility (オークストリート図書館施設 (修復、保存、デジタル化))
- ・ Grainger Library (グレインジャー図書館 (UIUC))
- ・ Champaign-Urbana Mass Transit District (シャンペーン・アーバナ MTD、バス会社)
- ・ Champaign Public Library (シャンペーン公共図書館)
- ・ Urbana Free Library (アーバナ・フリー図書館)
- ・ The Arthur Public Library (アーサー公共図書館)
- ・ University High Library (大学付属高校図書館)
- ・ Spulock Museum (スプロック博物館)

訪問した公共図書館では本の貸出だけでなく、多彩なプログラム (コンピューター関連、仕事探し、ストーリーテリングなど) が用意されていた。また、ボランティアスタッフも多く働いていた。シャンペーン公共図書館の会議室は地元住民の集会であれば、部屋が空いている限り、いつでも利用が可能 (営利は不可) となっている。そして、Amazon Kindle2 の貸出サービスも開始していた (2 時間、雑誌 12 冊と新聞がダウンロードされている)。イリノイ州の図書館相互協力は充実しており、自館にないものは、本だけでなく、視聴覚資料 (DVD、CD など) も他館より取り寄せることができる。

アメリカの公共図書館はデジタルデバイドを無くすため、インターネットの環境を整備しており、利用者は自宅に設備がなくても、図書館に来館すればインターネットを利用して情報にアクセスできる。オハイオのウェスタービル公共図書館でも、シカゴ公共図書館でも、インターネットの利用席は満席だった。不況のため、図書館の利用者数は増加傾向にある。求職活動や、DIY に関する書籍など、住民の中で図書館の存在価値は高まっている。しかし、税収不足のため公共図書館の運営は厳しく、各地で公共図書館の開館時間が短縮されるなど問題となっている。



ボランティア募集のチラシ(アーバナフリー図書館)



Amazon Kindle2(シヤンペーン公共図書館)

#### 4. 学内外の会議、講演会への参加

GSLIS のファカルティミーティング、イリノイ州図書館協会<sup>20</sup> (Illinois Library Association 以下 ILA に略) の年次総会など、学内外の会議に参加した。また、学部生の授業(ゲストとして質問に答える)や識者を招いた講演会にも参加した。ファカルティミーティングでは、報告・協議事項の他に、IT を活用した新サービスが紹介された。

- ・ ファカルティミーティング (GSLIS)
- ・ ILA カンファレンス(イリノイ州図書館協会年次総会)
- ・ グローバルスタディーズ(学部生との交流)
- ・ (講演) Rethinking Education in the Age of Technology (ノースウェスタン大学 Allan Collins 氏)
- ・ (講演) How Web Site Traffic Changes Over Time and Why It Matters (アリゾナ州立大学 Matthew Hindman 氏)
- ・ (講演) Isolation and Information Famine Stifling Africa's Growth (IFLA 会長 Ellen Tise 氏)
- ・ (講演) Who Owns Your Scholarship: Copyright, Publication, Agreements and Good Practice

(コロンビア大学 Kenneth Crews 氏)

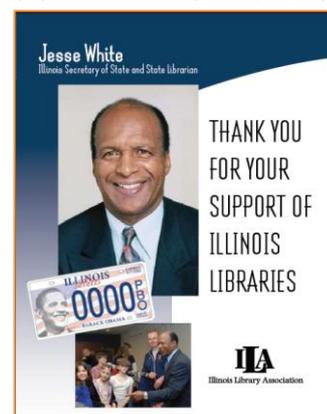
##### (1) ILA カンファレンス

ILA の年次総会にはイリノイ州務長官(知事、副知事に次ぐ No.3) の Jesse White 氏が出席した。White 氏は図書館スタッフに提供される新規プログラムの構想(技術ツールの研修会ならびに、公共図書館建設用の助成金)について説明した。また、ILA では、アドボカシー委員会がこの機会を利用し、ILA のアドボカシーである“the new Save Illinois Libraries campaign”<sup>21</sup>の説明会を開催し、ライブラリアンやライブラリーフレンズに州政府高官へのメッセージの書き方、伝え方の講習会を行った。同時に、White 氏に対して、今年度の図書館に対する州予算の獲得と、夏の読書プログラムの為に、オバマ大統領のナンバープレートを発売し、\$ 100,000 の利益を獲得したことを表彰した。会場は割れんばかりの拍手で White 氏を称えた。また、年次総会の閉会式では、司会者が大会の責任者だけでなく裏方の学生ボランティアまで紹介していた。その度に、出席者からスタンディングオベーションの嵐が巻き起こり、コミュニティを大切にする姿に感銘をうけた。年次総会を通じて、アドボカシーとファンディングの実際について、その一端を学ぶことができた。日本では公共図書館の運営は行政が責任を持つものであるが、米国ではステークホルダーが一体となって、運営に参画するものであることがわかった。



(上)オバマ大統領のナンバープレート

(下)Jesse White 氏 (ILA のポスター)



## (2) (講演) Who Owns Your Scholarship: Copyright, Publication, Agreements and Good Practice

コロンビア大学著作権オフィスの Kenneth Crews 氏による「研究成果に関する著作権者の権利」をテーマにした講演会に参加した。本講演会は法科大学院との共催であった。内容を簡単に紹介すると、以下のとおりである。

- ・著作権に関する選択権(出版社へ移譲する、しない、共有するなど)は著作権者が持っていること
- ・(著作権を移譲するのではなく) 著者の権利を守り、研究成果の著作権は共有すること
- ・(著作権に関する契約は) 熟読し、交渉し、控えを保存しておくこと

Crews 氏は情報技術の進展により、研究成果の電子化とアクセス条件(有料、無料)が学術的インパクトに大きく影響を与えるようになっていると分析している。そうした状況の中では、著作権の保有に関して友好的な出版社と契約し、適切な機関リポジトリに保存することが重要であると結論づけている。

## 5. プレゼンテーションのための講義と実践

イリノイ州図書館協会の年次総会で“Global Transformation”というテーマのもと、国ごとに発表を行った。発表はパワーポイントを利用し、所要時間は各国5分程度。この発表のために、効果的な発表の仕方(VTR視聴)、研修生同士による相互批評など、準備を進めた。発表用の資料を作成するにあたって、モーテンソンセンター副所長 Susan Schnuer 氏から、アドバイスを受けた。

### (1) コミュニティ

発表会に来てくれる人達は、日本の図書館がコミュニティの為にどんな活動をしているのか、知りたいと思っている。

### (2) エンターテイメント

アメリカ人はハリウッド映画に慣れている。アメリカにない日本らしい写真を多く盛り込んで、退屈させないこと。

### (3) 数字は少ない方がよい

詳細な数字は、あまり重要ではない。

## 6. ライブラリアンへのインタビュー

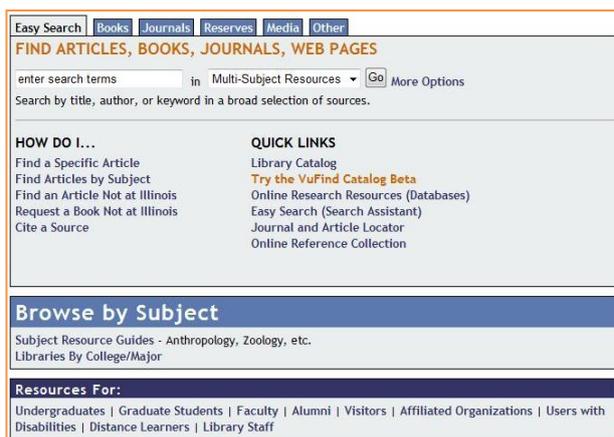
### (1) Robert Slater 氏(Web 構築について)

Robert Slater 氏に Web 構築について話を聞いた。Slater 氏は 2008 年より、Web 技術とコンテンツのコーディネーション(Web Technologies and Content Coordination、以下 WTCC に略) オフィスに所属している。Slater 氏の主な仕事は全体のコーディネーション、Web に関する各種委員会への提言、ワーキンググループの統括、ゲートウェイ(入口)のデザインである。図書館の Web サービスに関する情報収集、リソースに関する話し合いや調整などの実務の中心を担っている。

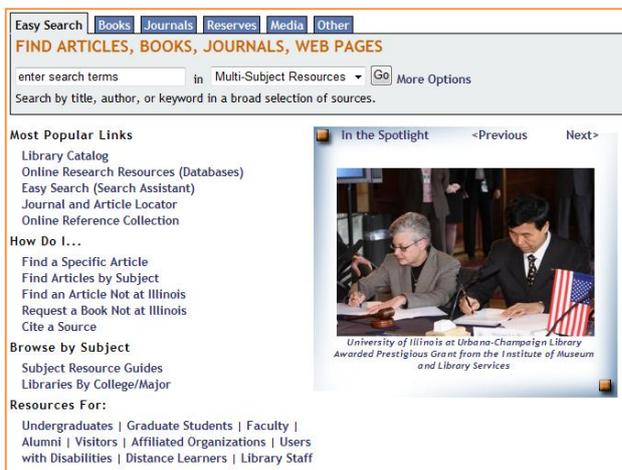
UIUC 図書館では Web の基本方針は各部門から選出されたメンバーによるワーキンググループ(Web Content Working Group、以下 WCWG に略) で検討される。常時 8~13 名がメンバーとして活動しており、IT スキルのあるライブラリアン、サブジェクトライブラリアン、マーケティング担当者など、バランスを考慮し編成されている。最近では、図書館のゲートウェイのデザインと構成についてレビューと改善を実施している。WCWG で検討された内容は、CAPT(Content Access Policy & Technology)委員会に提案され、正式に承認される。



UIUC 図書館のゲートウェイ(Top ページ) [v]



案1(採用)



(左)案2, (上)案3

(いずれもレビュー用モックアップ)

UIUC 図書館では OpenCMS<sup>22</sup>と TinyMCE<sup>23</sup>を利用して Web を管理している。CMS(Content Management System の略)とは Web のコンテンツを管理するソフトで、従来の HTML ファイルやディレクトリ構造などに関する技術的な知識がなくても Web サイトを構築できる。OpenCMS はドイツの Alkacon Software GmbH 社の提供するオープンソース。欧州を中心に多くの企業で Web 管理の為に利用されている。Web デザインのカスタマイズは CSS(Cascading Style Sheets)を使用。TinyMCE(Moxiecode Content Editor の略)は Java/HTML 等の Web ベースのエディターである。

CMS を導入した理由の一つにイリノイ州情報技術アクセシビリティ法<sup>24</sup>(Illinois Information Technology Accessibility Act、以下 IITAA に略)への対応があげられる。アクセシビリティ(Accessibility)とは「近づきやすさ」を意味し、Web デザインを評価する基準の一つとなっている。IITAA はイリノイ州の法律で Web サイトのフォントや色など障害者にもわかりやすいよう、一定のガイドラインを定めている。イリノイ州の行政機関、州立の高等教育機関はこの法律に則した Web デザインでなければならない。CMS を利用すれば、フォントの変換も容易になるため、同法にも対応できる。UIUC 図書館では、Web の情報更新は特定の部局が行うのではなく、各部局のライブラリアンが自部局の情報を更新することになっている。各部局のライブラリアンは資料構築に関する専門知識は持っていないことが多い。その為、Slater 氏の属する WTCC では、Web 構築に必要なスキルを身につけるため、OpenCMS の講習会を開催している(月に2~3回、1回につき2時間30分程度)。また、各部局に Web コンテンツ作成の相談役(Divisional Web Content Development Liaisons)がおり、ライブラリアンが旧ファイルを CMS ファイルに変換する際に困ったことがあれば、相談に乗ってくれる。

Slater 氏に Web 構築に際して、重視している点はどんなところか質問したところ、ユーザビリティであるとの回答を得た。常に利用者にとってのわかりやすさを重視しており、現在もゲートウェイに IM を移動するか検討中とのことだった(現在は IM の利用に1クリック必要)。また、UIUC 図書館では、前述した OpenCMS、OpenOffice.org のフリーウェアを始め、IM、YouTube、twitter、Facebook、flicker など、サードパーティー(外部のシステム)を取り込んで、サービスを提供している。安全性の面で外部のシステムに依存することに、問題はないか Slater 氏に質問したところ、IM で経験があるため心配していないとの回答だった。

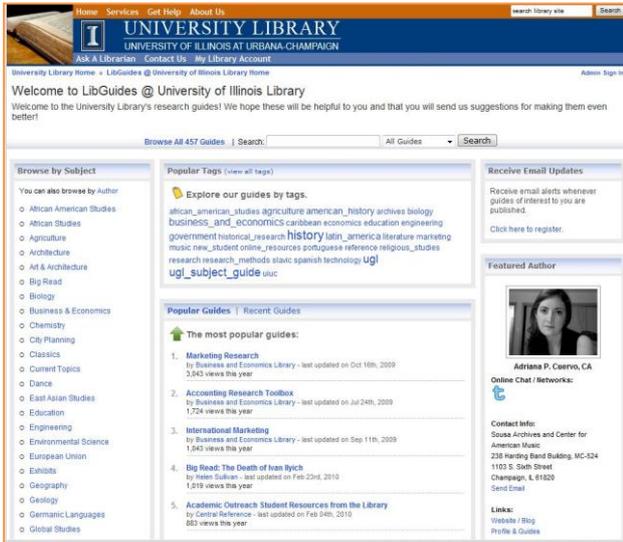
## (2) Merinda Kaye Hensley 氏(LibGuides について)

Merinda Kaye Hensley氏にLibGuidesについて話を聞いた。LibGuidesはSpringshare社<sup>25</sup>のオンラインサービスである。利用者参加型の学術情報コミュニティサービスでライブラリアンが作成したパスファインダーやサブジェクトガイド、コースガイドなどを登録し、Web上で利用者に提供することができる。ホストサービスなので、サーバー等の機器の設置が不要だけでなく、他大学が作成したガイドも検索し利用することも可能。従来のサービスに比べて、良い点はページのカスタマイズが容易なことである。ガイドの内容に対する利用者からのフィードバック機能(アンケート用ボックス、各種コメントの送信など)、ファイルのアップロード(word、PDF、PPTなど)、YouTubeなどの埋め込み、オンラインカタログや各種データベースへのリンクなど、自由にページを加工できる。

UIUC図書館では、各部門のライブラリアンがLibGuidesを基盤にサブジェクトガイド等を作成し、利用者へ情報を発信している。項目ごとにTagを設定できるため、作成が容易である。年間アクセス数の多いガイドTop10のタイトルが表示されると同時に、新たに登録されたガイド(直近10件)のタイトルも表示されるなど、利用者の関心を高める機能が付いており、学生にも大変、好評

である。敢えて問題点をあげるとすれば、担当者によりLibGuidesへの移行が進んでいないことである。説明文なしにデータベースや他のWebページへのリンクを貼るだけで済ませてしまい、機能を十分に活用しきれていない。

UIUC図書館は2010年2月末の時点で457のガイドを登録している。LibGuidesの利用料金はFTE方式ライセンス(\$899-\$2,999/年)で世界24カ国、1,097の図書館で利用されており、登録ガイド数は約74千件、作成ライブラリアン約17千人にのぼる。最後に、Hensley氏に注目する情報技術について質問したところ、YouTubeの使い勝手が良いのでWeb上のインストラクションに活用していきたいとのことだった。

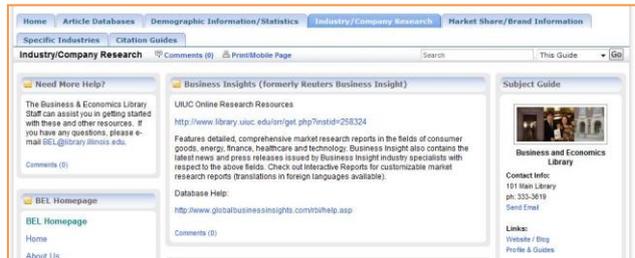


(上) LibGuidesのTopページ [vi]

(右上) ランキング1位の“Marketing Research”のガイド

(右) 上記ガイドの産業・企業検索のタグ(Tag)。

“Business Insight”(DB)の紹介とリンクが貼ってある。



### (3) Sarah Shreeves 氏(スカラリーコモンズについて)

Sarah Shreeves 氏に2010年春学期よりサービス開始を予定しているスカラリーコモンズについて、インタビューした。スカラリーコモンズは人文・社会科学専攻の大学院生、研究者、教員を対象にネットワーク上でデジタル技術を研究に応用するための情報基盤の提供を中心としたサービスである。ラーニングコモンズと同様に、CITES や ATLAS<sup>26</sup>(Applied Technologies for Learning in the Arts & Science、教養学部のIT支援室)など関係部署と図書館の協力で学術サービスを提供する。サービスの目的は、①E-Science(ネットを介した世界規模の協同)とE-Scholarship(リポジトリなど)に対する支援、②デジタル・ヒューマニティーズ(人文系研究に対するデジタル技術の応用)に対する支援、③GIS(Geographic Information Systemの略、地理情報システム)の利用に対するサポート、④デジタル映像資料の制作、利用、整理、⑤IT Sandbox(PGMを試験的に動作させる保護領域)、⑥仮想的、物理的コミュニティの構築などである。これらのサービスは、異なる部署で別々に提供されてきたが、スカラリーコモンズでは、各部署が協力でサービスを提供する。上記の目的を果たすため、次のようなサービスプログラムが計画されている。

#### ① 学問的コミュニケーションサービス

従来は研究成果を公開するにあたって、出版社に著作権を譲渡してきた。しかし、電子化の進展に伴い、著作物の管理が複雑になっている。変化に対応するため、正しい著作物(研究成果)の管理について、著者としての権利<sup>17</sup>を理解する必要がある。UIUC図書館では従来からワークショップや講演会の開催を通じて、著作権と著作者の権利に関する教育に力を注いできたが、スカラリーコモンズでは研究成果に対する著者としての権利について、院生・研究者の理解を促すためのサービスを提供する。また、付随するパブリック・アクセス、機関リポジトリサービス、電子学位論文(学位論文の提供)、などについてもサポートする。

#### ② データサービス

社会科学データのサービス、GISデータのサービス、データキュレーション(研究データを管理・評価し、アクセスできるように保存する)についてサポートする。

### ③ デジタイゼーション・サービス

デジタル・コンテンツの制作と管理、言語資料のデジタル解析(the digital text analysis)と活用、画像・映像資料のデジタル解析と活用をサポートする。

#### (4) Jim Hahn 氏(学部図書館の Web を活用したサービスについて)

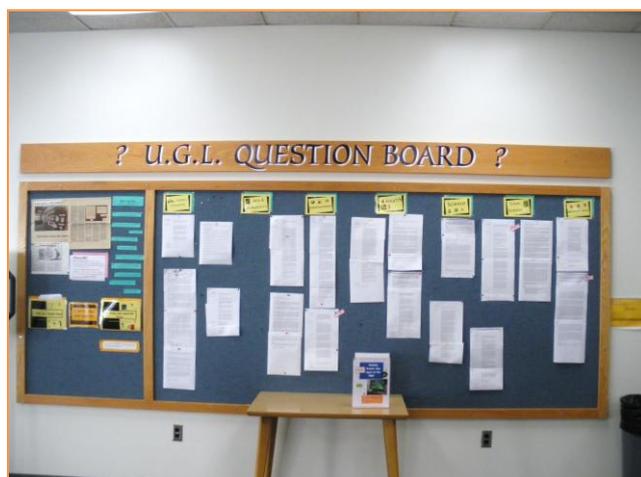
Jim Hahn 氏に学部図書館の Web を活用したサービスについて、インタビューした。学部図書館では Blog、Facebook、twitter、YouTube など、学生とコミュニケーションを図るために、Web サービスを積極的に活用している。Blog、Facebook はライブラリアンが更新し、twitter は学生スタッフが更新している(2~4 回程度/日)。それぞれのサービスに全ての情報を盛り込むことができないので、ツールに合わせて図書館のサイトにリンクを貼るなど、図書館サービスの情報発信の入口としてとして活用している。

2009/10/26	学部図書館から“Twitter”に投稿された内容
AM 8:19	9/11 から1ヶ月に満たない内にブッシュ大統領は愛国者法に署名した。あなたは、どう思いますか？(実際は 9.11 から 45 日後、2001 年 10 月 26 日にブッシュ大統領は愛国者法に署名。図書館の帯出記録を司法当局が調査できるようになったことを、踏まえてのもの) Less than a month after the 9/11 attacks then President Bush signed the Patriot Act into law. How does it affect you?
AM10:01	ライブラリアンのオフィサーがあなたの憂うつを解決します。本日 3~5 時、291 教室で個別相談会を開催！ Let Librarian's Office Hours cure your research blues. Get personalized help today from 3-5 in rm 291!
AM11:34	午後 2:30 から 4:30 まで、一般教育部が相談を受け付けます。あなたの専攻の締め切りや必要条件を理解するのに役立てよう！ Division of General Studies advising today at the UGL, 2:30-4:30! Get help figuring out academic deadlines or requirements for your major.
PM12:04	1年生へ:調査に参加して、コーヒー券(\$5)を手に入れよう！所要時間は 15~20 分、面白いよね！ First year students: participate in a research study & get a \$5 Espresso gift card. Takes 15-20 mins and could be fun!
PM 5:00	スポーツやスポーツ医学に関する記事なら、Sport Discus (データベース)を試してみよう。 For articles on Sports or Sports Medicine try Sport Discus.

また、“Question Board”(通称“QB”)と呼ばれる、質問コーナーが学部図書館の地下2階入り口の掲示板にあり、学生は図書館の利用方法について質問ができる。回答は同掲示板と Web サイト上の掲示板、両方に掲載される。GSLIS の学生スタッフが回答を担当しており、とても親しみやすく、好評である。1972 年より、学部図書館のレファレンスサービスの一部として開始され、1997 年に Web 上のサービスが始まってからも質問・回答は壁面の掲示板、Web 版と両方で運営されている。



学部図書館の HP(YouTube 動画が埋め込まれている) [vii]



地下2階入り口にある“Question Board”

#### (5) Wendy Shelburne 氏(電子資料について)

UIUC 図書館で電子資料を担当している Wendy Shelburne 氏に話を聞いた。Shelburne 氏は契約内容の確認や各種ツールの選定など、全体に係る業務を担当している。各電子ジャーナルの新規購読・停止などの選択は各部門別図書館のライブラリアンが行う。購読に必要な予算も各部門別図書館から支出される。UIUC は CIC<sup>28</sup>(Committee on Institutional Cooperation, Big10(11 大学)+シカゴ大の大学間コンソーシアム)、CARLI<sup>29</sup>(Consortium of Academic and Research Libraries in Illinois、イリノイ州内の 153 館の大学図書館コンソーシアム)、に加盟している。電子資料・各種ツールの購読価格については、コンソーシアムを通じて出版社と交渉し、既に決まっているため、UIUC として個別に行ってはいない。コンソーシアムの一員として、出版社(バンダー)と価格や利用条件をめぐる非常に厳しい交渉が続いたが、現在は交渉が完了しているため、とても安定している。

## (6) Lisa Hinchliffe 氏(情報リテラシーについて)

Lisa Hinchliffe 氏に情報リテラシー教育(支援)について、インタビューした。現在、UIUC 図書館では、およそ 1,000~1,500 回ほどの講習会(授業内ガイダンス、ワークショップ)を開催しており、参加者は年に 2 万人を超えている。情報リテラシープログラムを始めて、既に 7 年が経過し、学内に不可欠なサービスとして定着している。情報リテラシー教育(支援)は授業内ガイダンスだけでなく受講後の学習に役立つよう、各種ガイド(パスファインダー、サブジェクトガイド、コースガイドなど)の作成、ラーニングコモンズなど快適な学習スペースの提供など、総合的に取り組まなければならない。特に、UIUC 図書館のように大きな組織では、各部門別図書館のライブラリアンが持っているコレクションに関する豊富な専門知識を研究だけでなく、学習支援に結びつけることが重要である。強いて現状の問題点をあげれば、UIUC の学生は 4 万人を超えるため、ライブラリアンの人員体制が不足しがちなことである。学部図書館のインストラクションとオリエンテーション担当のライブラリアン、GSLIS の学生スタッフを中心に、各部門別図書館、中央図書館のライブラリアンが担当している。1 年生向けの授業内ガイダンスは 50 分コース(×3 パターン)、75 分コース(×3 パターン)に分かれており、教員は計 9 コースの中から 1 つを選択し、Web ページより申し込むことができる。また、情報リテラシー教育(支援)の効果をどのように測定すべきか質問したところ、インストラクション時のワークシートや授業内のペーパー(参考文献・資料)を見ることが考えられるとの回答だった。



1年生向けガイダンスメニュー[view]

## V. アメリカの大学図書館における動向

### 1. ワークショップ

UIUC 図書館では授業期間中、利用者(教職員、研究者、学生など)向けにワークショップを開催している。E-vanced 社の図書館向けソフトウェアを利用して予定(カレンダー)が公開されており、①参加したいワークショップを選んでクリックすると、②申し込みの画面に切り替わる。氏名、電話番号、メールアドレス、を入力する。すると、③入力したメールアドレス宛に確認の連絡が自動的に図書館から届く仕組みになっている。

	Sunday	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday
Week 41					Uncover and Discover #4: Designing Assignments using Library Resources	Current Awareness: Tools to Stay Current in Your Field	
42		6	7	8	9	10	
43		11	12	13	14	15	16
44		Journal Impact Factors: How to Identify Key Research in Your Field	Current Awareness: Tools to Stay Current in Your Field	Infotactics: Developing Information Management Skills	Disposing in Data? RefWorks can Help	Research Year: Why Did Winter's Block	17
45		18	19	20	21	22	23
46		The Story Researcher for Illinois Staff	Others' Money? Finding and Securing Grant Funding	4 out of 5 Professors Agree: Citing Falls in Citation Counts. What Can You Do Better?	CPISR: Health, Economic, Social & Political Data for Secondary Analysis	Disposing in Data? RefWorks can Help	24
47		25	26	27	28	29	30
48		Understanding Open Access	Practical Copyright Considerations for Teaching and Research	The Story Researcher for Illinois Staff	Practical Copyright Considerations for Teaching and Research	Responsible Scholarship Practices: Plagiarism and Academic Integrity at Illinois	Understanding Open Access

Workshop の予定(カレンダー) [tx]

**Responsible Scholarship Practices: Plagiarism and Academic Integrity at Illinois**

Event Type: Workshop  
Date: 10/29/2009  
Start Time: 2:00 PM  
End Time: 4:00 PM

Description: This workshop is geared toward the incoming international student who would like to familiarize themselves with the academic standards of doing research at the University of Illinois. Academic integrity means honesty and responsibility in scholarship. We'll introduce you to the Illinois documents that provide guidelines for academic integrity in teaching, research, service, coursework, research and publication, as well as information on intellectual property. We'll explain the difference between unintentional and intentional plagiarism and how to make sure that you cite your research properly.

\* Introduction to the University of Illinois documents defining academic integrity and plagiarism  
\* Discussion on what constitutes plagiarism at the University of Illinois  
\* How to locate your citation style and the supporting resources needed to properly cite your work  
\* Time to answer your questions.

Library: University Library  
Location: Library 314  
Registration Ends: 10/26/2009 at 12:00 AM  
Contact: Merinda Hendry  
Contact Number: (312) 244-1880  
Presenter: Emily Lone  
Link: The Story Researcher  
Status: Ongoing

**Registration**

\*Attendee First Name: \_\_\_\_\_  
\*Attendee Last Name: \_\_\_\_\_  
\*Attendee Phone Number: (\_\_\_\_) \_\_\_\_ - \_\_\_\_ Ext. \_\_\_\_\_  
Alternate Phone Number: (\_\_\_\_) \_\_\_\_ - \_\_\_\_ Ext. \_\_\_\_\_  
\*Attendee Email Address: \_\_\_\_\_

\* = Required Field

[Complete Registration](#) [Back](#)

ワークショップの申込画面

「盗作と学問的誠実性」(10/29)と「オープンアクセス」(10/30)をテーマにしたワークショップに参加した。各参加人数は 5 人と 3 人。受講しやすいよう、同じ内容のワークショップを複数回、異なる曜日と時間帯で開催している。パワーポイントによる解説と同時に、随時、質問(クイズ)があり、参加者の理解が進むよう工夫されていた。例えば、「盗作と学問的誠実性」のワークショップでは、Martin Luther King, Jr(キング牧師)、Helen Adams Keller(ヘレン・ケラー)、Joseph Robinette "Joe" Biden, Jr.(ジョー・バイデン副大統領)の共通点は何か?という質問から始まり、正解(三人とも他人の文章を自分の文章として発表した)を発表した後に、「盗作は偉人であっても、犯しやすい間違いなのです。ルールを知らなくては、誰でも同じ過ちを繰り返してしまう可能性があります」と、参加者に身近な問題として意識を持たせるよう工夫されていた。

日付	テーマ
10/1	Uncover and Discover #3: The Graduate Student Toolkit (大学院生のための図書館利用ガイド～各種ツール、学位論文の機関リポジトリへの登録方法など)
10/1	Uncover and Discover #4: Designing Assignments using Library Resources (図書館の資料を利用した課題作成の方法)
10/2,13	Current Awareness: Tools to Stay Current in Your Field(文献レビューのための RSS、アラートの設定方法)
10/6,5,23	Drowning in Data? RefWorks can Help(RefWorks の利用方法)
10/7	How to Build a Great Poster(効果的なポスターセッションの方法)
10/8,14	InfoHacks: Developing Information Management Skills(情報整理術～RefWorks、RSS などの利用方法)
10/12,13	Journal Impact Factors: How to Identify Key Research in Your Field(インパクト・ファクターの利用方法)
10/16	Research Your Way Past Writer's Block(学位論文作成に関する図書館の利用相談)
10/19	A Library Introduction to GIS(地理情報システム“GIS”の利用方法)
10/19,28	The Savvy Researcher for Illinois Staff(各種検索システムの利用方法)
10/20	Citation Chasing: The Graduate Student's Guide to the Lit Review(大学院生向け文献レビュー案内)
10/20	Where's the Money? Finding and Securing Grant Funding (助成金・奨学金情報データベース“The Illinois Researcher Information Service”の利用方法)
10/21	4 out of 5 Professors Agree: Citing Polls in Your Papers Will Earn You a Better (米国の世論調査で代表的なデータベース“Roper iPOLL”の利用方法)
10/22	Finding and Using Statistics in the Social Sciences (社会科学系統計データの見つけ方、①LexisNexis Statistical、② FedStats、 ③World Development Indicators (WDI) Online を実習)
10/22	ICPSR: Health, Economic, Social & Political Data for Secondary Analysis(ICPSR の利用方法)
10/23	Rock the Data, Rock the Vote: Finding and Using National Election Survey Data (全米選挙・投票行動データベース“The American National Election Studies”の利用方法 )
10/26,30	Understanding Open Access(オープンアクセスの意義、最新動向と機関リポジトリの活用)
10/27,28	Your Research Rights: Ownership Awareness to Maximize the Impact(「著作権の権利」に関する正しい理解)
10/27,28	Practical Copyright: Considerations for Teaching and Research(著作権の実際、正しい理解と公正な利用)
10/29	Responsible Scholarship Practices: Plagiarism and Academic Integrity at Illinois(盗作と学問的誠実性について)

2009 年 10 月開催のワークショップ。学期始まりということもあり、入門的なものが多い。

## 2. ラーニングコモンズについて

ラーニング・コモンズは 2006 年に学部図書館に設置された学生用の共同学習スペースである。共同学習の場を提供すると共に、情報機器の貸出を行っている。貸出用ではないが、スキャナーが館内の固定 PC 端末に接続されており、自由に利用することができる。UIUC ではコピー機よりもスキャナーを使い複写する利用者が多い。研修期間中(10 月 12 日)には PC を操作せず、タッチスクリーンの操作だけでスキャンが可能な“Book Scan Station”も導入された。スキャナーは学部図書館だけでなく、中央図書館のサービスカウンターの端末にも接続されている。スキャンしたデータは PDF、Word、Excel などのファイルで、保存可能。館内のプリンターからの印刷は有料となっており、料金は全館共通で 10¢/枚(事前に大学の口座にチャージが必要)。同フロアには、ライティングセンター(The Writer's Workshop<sup>30</sup>)や CITES、他部局のサテライト・オフィス(キャリア・センター、スタディ・アブロード事務局、マッキンリー健康センター)が設置され、合わせて 70 人以上のスタッフが各種サポートを行っている。また、家庭用ゲームの研究もおこなわれており、ラーニングコモンズの一角にゲームコーナーが設置されている。資料と同様にゲームソフトも借りられる他、携帯ゲーム機器の貸出も行っている。

ラーニングコモンズ(学部図書館)

	地下1階(コラボレーションルーム)	地下2階(スタディールーム)
利用目的	グループワーク、各種プロジェクト、ディスカッション	静かに集中して勉強する

利用方法	先着順、時間制限なし、 オープン(鍵なし)、おしゃべり可能	先着順、2時間(延滞料: \$1/時間)、 要手続き(鍵あり)、おしゃべり不可
設備	ホワイトボード(マーカー、黒板消しはサービスデスクに返却)	
収容人員	6~8人	4~5人
室数	4部屋	4部屋

貸出備品	貸出期間	備考
USB ドライブ(2GB)	1週間	
ノート PC(17インチ、HP 製、20台、マウス、電気コード、盗難防止用ロック付き、Microsoft Office などソフトはインストール済み、DVDドライブ付属)	2時間	延滞料: \$2/時間
グラフ電卓	1週間	テキサス・インスツルメンツ社製
MP3 プレーヤー	1週間	iPod nano & Sansa Clip (SanDisk 製、日本未発売)
外付けHDD(USB 接続、160GB)	1週間	デジカメやデジタル・ビデオカメラなど画像・動画データ用
デジカメ(720万画素)	1週間	パナソニック社製
(カメラ用)三脚	1週間	サンパック社製
デジタル・ビデオカメラ	1週間	パナソニック社製
Voice レコーダー	1週間	パナソニック社製
GPS	1週間	Garmin 社製 GPS60
デスクトップマイク(USB 接続)	1週間	ノート PC に接続し、音声を記憶、ロジクール社製
ホワイトボード用マーカー、黒板消し	2時間	

#### ライティングセンター

室名	利用時間				備考
	月~木	金	土	日	
ライターのワークショップ (the Writer's Workshop)	9 am - 8 pm	9 am - 3 pm	not open	1 pm - 5 pm	博士課程の大学院生(英文学専攻)が相談を受け付けてくれる。

※事前に予約が必要。1回の相談はおよそ50分ほど。相談は一日に1回、週2回まで。

#### その他の施設

室名	利用時間	設備(利用用途)
CITES	日曜日 10:00 am - 金曜日 10:00 pm (月~木曜日 24時間) 土曜日 10:00 am - 10:00 pm	iMac 24台(+講師1台)、Dell 32台、スキャナー、プロジェクター
図書館インストラクションルーム	図書館ガイダンス以外は利用不可	windows PC 50台
メディア鑑賞室	夜間、週末を除く。授業期間中は予約が必要	収容人員20~25名。グループで視聴覚教材を利用したいときに、使用可能。

#### サテライトオフィス(ラーニングcommonsと同フロア)

部局名	受付時間	サービス内容
キャリア・センター	月~火曜日 7:00pm - 9:00 pm	履歴書とカバーレター(履歴書に添付する履歴書と仕事の関連を中心に書く手紙、自己PR)の批評
	水曜日 10:00am-12:00 pm	
	木曜日 3:00pm-6:00 pm	
	日曜日 2:00 pm-9:00 pm	
マッキンリー健康センター	第三水曜日 1:00 pm-3:00 pm	健康相談(レファレンスカウンター)
スタディー・アブロード事務局	第一月曜日 11:00am-1:00 pm	スタディー・アブロードの相談
	第三水曜日 8:00pm-10:00 pm	

※予約なしで相談可能

## ゲームコーナー

機器	期間	ソフト
Xbox360	2時間	123(別途、XBox 用20)
Wii	2時間	105
プレイステーション3	2時間	68(別途、PS2 用54)

※大型液晶モニターに以下のゲーム機が接続されており、いずれか1台のみ利用可能

## 貸出用携帯ゲームの機器

機器	期間	ソフト
任天堂DS	1週間	116
ソニー PSP	1週間	53

## VI. 課題・感想

### 1. Lib2.0 について

図書館が利用者とコミュニケーションを図るツールとして Web2.0 を活用していることは、自然な成り行きである。既に Facebook や twitter などのサービスは図書館だけでなく、企業や著名人の間でも利用されており、米国では一般的な存在となっている。学部図書館の Hahn 氏に Facebook や twitter を 選んだ理由を尋ねたところ、「みんなが良く使っているサービスだからね。日本では違うの？」と、利用は当然であるかのような答だった。講義で学んだ内容、「利用者を中心にサービスを考える」(ライブラリアセスメント)、「コミュニケーションを大切に、相手のニーズに応える」(ライブラリーマーケティング)が実践されていると感じた。Facebook などによる情報発信は図書館に出来ない潜在的な利用者へのアプローチとして注目されている。日本の大学では Facebook、twitter の利用方法、YouTube のコンテンツ作成方法など、個別のサービスについて、十分なノウハウが蓄積されていない。その為、こうしたサービスの提供は一部の大学に限られているが、利用の仕方が分かれば、Web2.0 の活用は十分に期待できる。また、IDEALS や LibGuides では所蔵している論文や各種ガイドの利用ランキングが公開されており、利用者の好奇心をくすぐるような工夫がされていた。このような取り組みも見習いたい。

### 2. 研究支援について

図書館のイニシアティブが研究支援に関しても強く発揮されている。先に述べた通り、UIUC 図書館は他の部局と協同でデジタル技術を人文・社会系の研究に応用するサポートや著作権に関するコンサルティングなどを中心とした、スカラリーコモンズを開始する。中でも、GIS については応用範囲が広く、日本の大学図書館でも活用をサポートする取り組みは検討課題となるのではないかと。GIS は研究だけでなく、校内を循環するバス(MTD)の運行状況(携帯電話から確認が可能)や GSLIS の子供向け自由研究講座でも活用されており、教職員、学生にとって身近なものになっている。

### 3. 情報リテラシー教育(支援)について

Hinchliffe 氏へのインタビュー後、ARL の統計データを確認したところ、レファレンスの件数が減少していることが分かった。内容を確認していないので因果関係は検証できていないが、講習会、各種ガイドの作成、ラーニングコモンズなど図書館の提供するサービス(支援)により、利用者の情報リテラシーが高くなった結果とも考えられる。情報リテラシー教育(支援)の効果測定については、今後の課題としたい。

	講習会の回数	参加者数	レファレンス
<b>2008</b>	1,197	21,975	179,742
<b>2007</b>	1,468	25,501	229,293
<b>2006</b>	1,052	15,715	273,738

(出典)ARL Statistics 2008-2007, 2007-2006, 2006-2005<sup>91</sup>

### 4. ラーニングコモンズについて

学部図書館の共同学習スペースは夜中の 12 時を過ぎても、多くの学生で席が埋め尽くされていた。グループワークがとて盛んで、眉間に皺を寄せながら、1 台のラップトップを 3~4 人で見つめるグループや、友達同士、仲良く並んで学習しているグループなど、思い思いに課題に取り組む学生の姿が見られた。ラーニングコモンズは会話が自由だが騒々しさはなく、落ち着いた雰囲気だった。学生寮が大学の敷地内にあり、校内バスも 24 時間運行しているので、学生は時間を気にせずに勉強ができる。キャンパスの治安に問題があるものの、日本の学生にも、このような環境で勉強させてあげられたらと羨ましく思った。

### 5. グレインジャー図書館について

UIUC には学部図書館の他に 24 時間(月~木)、開館している図書館がもう 1 つ存在する。エンジニアリングスクールのグレ

インジャー図書館である。こちらも学生に人気があり、夜中の2時過ぎまで満席だった。当初、24時間の開館ではなかったが、開館時間の延長を訴える学生の運動により、現在のような運営になっている。学生の行動力と図書館の対応に感心した。

## 6. その他

職場の同僚から、米国のライブラリアンは明るく、楽しそうに仕事をしていると聞いたことがあり、そのようなイメージを持っていた。しかし、図書館ツアーやインタビューを通じて、私が接した現地のライブラリアンは、黙々と仕事に取り組んでおり、予想とは少し異なっていた。野口氏(UIUC アジア図書館)によると、インタビューに応じてくれた若手から中堅のライブラリアンは、新規サービスへの取り組みなど特に業務量が多く、出張(研究会)や論文執筆もあり、多忙を極めている。そんな中で、私のインタビューに時間を割いてくれた。「明るく、楽しそうなライブラリアン」というより、「タフで心の温かいライブラリアン」と言うのが私の印象である。図書館長の Paula T. Kaufman 氏は講義の中で、「不況の影響で財政は厳しいが合理化を進め、雇用には手を着けずに乗り越えたい」と言及していた。スカラリー・コモモンズを担当する Shreeves 氏は IDEALS との兼務である。増員なしで、新規サービスに取り組まなければならない。

## 7. 最後に

本研修を支えて下さった私立大学図書館協会国際委員会の皆様、募集期限の延長をお願いして下さった宮部頼子先生(立教大学教授)、伊藤秀弥氏(2007年度派遣)、研修期間中にお世話になったイリノイ大学モーテンソンセンター所長の Barbara J. Ford 氏、副所長の Susan Schnuer 氏、並びに同大学図書館員の皆様、特にアジア図書館の野口契子氏に深く感謝いたします。また、歴代のプログラム参加者の鷹尾道代氏、梅澤貴典氏、高井響氏、勢田玲生氏(以上、私立大学図書館協会よりの派遣)には、有益なご助言をいただきましたことに感謝申し上げます。

## 参考文献

1. 鷹尾道代:「海外派遣研修の報告と今後の課題」。私立大学図書館協会。(オンライン), 入手先 <[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken\\_report2003.html](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken_report2003.html)>, (参照 2010-03-04)。
2. 梅澤貴典:「2004年度海外派遣研修報告書」。私立大学図書館協会。(オンライン), 入手先 <[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken\\_report2004.html](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken_report2004.html)>, (参照 2010-03-04)。
3. 峯環:「2005年度海外派遣研修報告」。私立大学図書館協会。(オンライン), 入手先 <[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken\\_report2005.pdf](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken_report2005.pdf)>, (参照 2010-03-04)。
4. 高井響:「2006年度海外派遣研修報告書」。私立大学図書館協会。(オンライン), 入手先 <[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken\\_report2006.pdf](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken_report2006.pdf)>, (参照 2010-03-04)。
5. 伊藤秀弥:「2007年度海外派遣研修報告書」。私立大学図書館協会。(オンライン), 入手先 <[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken\\_report2007.pdf](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken_report2007.pdf)>, (参照 2010-03-04)。
6. 勢田玲生:「2008年度海外派遣研修報告書」。私立大学図書館協会。(オンライン), 入手先 <[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken\\_report2008.pdf](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken_report2008.pdf)>, (参照 2010-03-04)。
7. 魚住英子、岡田恭子、小島勢子、鈴木昭子、仲山加奈子:「2005年度海外集合研修報告書について」。私立大学図書館協会。(オンライン), 入手先 <[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/shugo\\_report2005.pdf](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/shugo_report2005.pdf)>, (参照 2010-03-04)。
8. 宮本智佳子、宮本美帆子、杉本昌彦:「2004年度海外集合研修報告書について」。私立大学図書館協会。(オンライン), 入手先 <[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/shugo\\_report2004.html](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/shugo_report2004.html)>, (参照 2010-03-04)。
9. 庄ゆかり氏「イリノイ大学モーテンソンセンター-Fall2006 Associate Program参加報告」。『大学図書館研究』No.80, 2007, p.108-119。
10. 村上浩介:「CA1624 - 次世代の図書館サービス? —Library 2.0 とは何か?」。Current Awareness Portal。(オンライン), 入手先 <<http://current.ndl.go.jp/ca1624>>。(参照 2010-03-04)。
11. 福田都代:「CA1646 - 動向レビュー: 米国における図書館アドヴォカシーの展開」。Current Awareness Portal。(オンライン), 入手先 <<http://current.ndl.go.jp/ca1646>>。(参照 2010-03-04)。
12. カレントアウェアネス-E741 - NIHパブリックアクセス方針義務化等を含む予算案が成立」Current Awareness Portal。(オンライン), 入手先 <<http://current.ndl.go.jp/e741>>。(参照 2010-03-04)。

13. カレントアウェアネス-E「E938 - 図書館組織の気風と多様性を評価する“ClimateQUAL”」Current Awareness Portal. (オンライン), 入手先<<http://current.ndl.go.jp/e938>>. (参照 2010-03-04).
14. 野口契子.“北米の大学図書館におけるWeb2.0 以後の変化”. 情報管理 51 (10) :733-742. (オンライン), 入手先<[http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/51/10/733/\\_pdf/-char/ja/](http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/51/10/733/_pdf/-char/ja/)>. (参照 2010-03-04).
15. SPARC.“著者の権利”. 私立大学図書館協会. (オンライン), 入手先<[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/shugo\\_report2004.html](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/shugo_report2004.html)>. (参照 2010-03-04).
16. 日経パソコン編(2008)『日経パソコン用語事典 2009』日経BP社

---

#### 脚注1 (参考URL、本文中にWebページを紹介)

[ i ] PennTags

<http://tags.library.upenn.edu/>

[ ii ] Facebook (UIUC学部図書館)

<http://www.facebook.com/pages/Urbana-IL/Undergraduate-Library-UIUC/6148508508>

[ iii ] Ask Librarian

<http://www.uic.edu/depts/lib/digital/>

[ iv ] WolframAlpha

<http://www.wolframalpha.com/>

[ v ] UIUC図書館(ゲートウェイ)

<http://www.library.illinois.edu/>

[ vi ] LibGuides (UIUC図書館)

<http://uiuc.libguides.com/index.php>

[ vii ] 学部図書館 (UIUC)

<http://www.library.illinois.edu/ugl/>

[ viii ] 1年生用ガイダンスメニュー

[http://www.library.illinois.edu/ugl/instructors/instruction\\_menu.html](http://www.library.illinois.edu/ugl/instructors/instruction_menu.html)

[ ix ] ワークショップのカレンダー (UIUC図書館)

<http://www.library.illinois.edu/calendar/eventcalendar.asp?libnum=0>

#### 脚注2 (参考URL、その他)

<sup>1</sup> モーテンソンセンター (Mortenson Center for International Library Programs)

<http://www.library.uiuc.edu/mortenson/>

<http://twitter.com/MortensonCenter>

<http://www.facebook.com/mortensoncenter>

<sup>2</sup> IDEALS

<http://www.ideals.uiuc.edu/>

<sup>3</sup> SHERPA/RoMEO

<http://www.sherpa.ac.uk/romeo/>

<sup>4</sup> Journal Info

<http://jinfo.lub.lu.se/jinfo?func=home>

<sup>5</sup> CITES (Campus Information Technologies and Educational Services)

<http://www.cites.illinois.edu/>

<sup>6</sup> OpenOffice.org

<http://www.openoffice.org/>

<http://ja.openoffice.org/> (日本語)

<sup>7</sup> ARL (Association of Research Library)

- 
- <http://www.arl.org/>
- <sup>8</sup> LibQUAL+ 2008 Results (UIUC)  
<http://www.library.illinois.edu/assessment/libqualresults.html>
- <sup>9</sup> Commoncraft社 (Explanation in plain english (手書きの切り絵によるアニメーション)シリーズ)  
<http://commoncraft.com/> (HP)  
<http://www.youtube.com/user/leelefever> (動画)
- <sup>10</sup> RSS Feeds at UIUC Library  
<http://www.library.illinois.edu/blog/>
- <sup>11</sup> “Librarian And Information Science News”が選んだライブラリアン10人のブログ  
[http://www.lisnews.org/10\\_librarian\\_blogs\\_read\\_2009](http://www.lisnews.org/10_librarian_blogs_read_2009)
- <sup>12</sup> delicious(ソーシャルブックマーキング)  
<http://delicious.com/>
- <sup>13</sup> AIM WIMZI ウィジェット (AOL)  
<http://wimzi.aim.com/>
- <sup>14</sup> One True Media  
<http://www.onetruemedia.com/>
- <sup>15</sup> Slide Share  
<http://www.slideshare.net/>
- <sup>16</sup> Flickr  
<http://www.flickr.com/>
- <sup>17</sup> Library Digital Content Creation  
<http://www.library.illinois.edu/dcc/>
- <sup>18</sup> GSLIS Help Desk  
<http://www.lis.illinois.edu/helpdesk>
- <sup>19</sup> Liblime 社  
<http://www.liblime.com/>
- <sup>20</sup> ILA (Illinois Library Association、イリノイ州図書館協会)  
<http://www.ila.org/>
- <sup>21</sup> Save Illinois Libraries (アドボカシー)  
<http://www.saveillinoislibraries.com/>
- <sup>22</sup> OpenCms  
<http://www.opencms.org/en/> (公式サイト)  
<http://www.opencms.jp/> (日本語公式サイト)
- <sup>23</sup> TinyMCE  
<http://tinymce.moxiecode.com/>
- <sup>24</sup> Illinois Information Technology Accessibility Act (イリノイ情報技術アクセシビリティ法)  
<http://www.dhs.state.il.us/page.aspx?item=32765>
- <sup>25</sup> Springshare社 (LibGuides)  
<http://www.springshare.com/>
- <sup>26</sup> ATLAS (Applied Technologies for Learning in the Arts & Science)  
<http://www.atlas.illinois.edu/>
- <sup>27</sup> 著者の権利 (SPARC)  
[http://www.soc.nii.ac.jp/janul/j/projects/isc/sparc/author\\_rights/SPARC\\_Author\\_Addendum.html](http://www.soc.nii.ac.jp/janul/j/projects/isc/sparc/author_rights/SPARC_Author_Addendum.html)
- <sup>28</sup> CIC (Committee on Institutional Cooperation)  
<http://www.cic.net/Home.aspx>

---

<sup>29</sup> CARLI (Consortium of Academic and Research Libraries in Illinois)

<http://www.carli.illinois.edu/>

<sup>30</sup> Writer's Workshop (The Center of Writing Studies)

<http://www.cws.illinois.edu/workshop/>

<sup>31</sup> ARL Statistics

<http://www.arl.org/bm~doc/arlstat08.pdf> (2007-2008)

<http://www.arl.org/bm~doc/arlstat07.pdf> (2006-2007)

<http://www.arl.org/bm~doc/arlstat06.pdf> (2005-2006)